The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	蜂矢真郷先生をお送りする
Author(s)	金水, 敏
Citation	語文. 2010, 92-93, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69131
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

蜂矢真郷教授近影

2009 年 8 月 26 日、63 歳の誕生日に、

研究室旅行において、白山スーパー林道にて

（撮影：鹿末陽子）

蜂矢真郷先生をお送りする

金　水　　敏

蜂矢真郷教授がこの三月、停年をもって大阪大学を退職される。

先生は、京都大学文学部を卒業され、同志社大学大学院文学研究科修士課程を修了、以後親和女子大学（現、神戸親和女子大学）専任講師、帝塚山学院大学文学部助教授、奈良女子大学文学部助教授等を経て一九九一年四月、大阪大学文学部に助教授としてご着任になった。その後、教授に昇任され、また大学院重点化に伴い大阪大学大学院文学研究科に所属されることとなったが、都合一九年にわたって文学部・文学研究科に在職され、学生の指導とご自身の研究とに尽力されてきた訳である。

学会活動においては、国語学会（二〇〇四年四月より「日本語学会」と改称）では編集委員・大会運営委員を歴任され、また二〇〇〇年四月より現在にいたるまで評議員を務められ、学会運営の指導・助言に当たられてきた。訓点語学会では二〇〇三年一一月より現在まで委員を務められ、また萬葉学会では一九七九年一二月以来編集委員を、二〇〇九年四月からは代表を務められている。とりわけ、国語語彙史研究会では一九八九年より委員の任に当たられ、以後編集主任を経て、二〇〇一年四月以降は前田富祺先生の後を受け、代表幹事として文字通り研究会を支えられてきた。同様に国語文字史研究会でも、二〇〇八年四月以降代表を務められている。

先生のご研究は、上代を中心とする国語語彙の語構成論的研究をもってその根幹となすと言ってよいだろう。一九九八年には

『国語重複語の語構成論的研究』を上梓され、本年三月には続編とも言うべき『国語派生語の語構成論的研究』が出版される。前者に対しては、同年の一一月に新村出賞が与えられた。「上代を中心とする」と述べたが、先生がご著作の中で引用される資料は上代にとどまらず、平安・鎌倉はもちろんのこと、近代資料にいたるまで、国語資料と言えるものはことごとく目を通されているのではないかと思えるほどの博捜ぶりである。小さなことばの部品を選り分け、磨き上げ、一つ一つ組み立てていく様はまるで精密機械を見るようであり、しかも組み上げられた体系は厳密な実証的手法に支えられ、見事に国語語彙の滔々たる語脈を浮かび上がらせている。このような、文献国語史の鑑とも言うべき先生が身近にいらっしゃったということは、学生にとってのみならず、われわれ同僚にとっても何よりの幸せであった。

大学運営に当たっても、先生のご貢献は並々ならぬものがあった。ご着任以来、出席されたすべての教授会、各種委員会、講座会議資料は約三ミリ四方の繊細な字で書かれた詳細なメモとともに研究室にすべて保存されていると伺っている。時に、事務方でも残っていないような記録でも、蜂矢先生に伺えば必ずあるという話を何人もの先生方から伺った。会議などでは、事の経緯を正しく踏まえ、整然と筋の通った発言をなさるのであり、議事が混迷に陥りかけた時に先生のご発言によってぱっと結論までの道筋が開かれる、という場面を何度も間近に見てきた。

蜂矢先生は学生の未熟な研究に対し、叱責したり非難したりといったことは皆無であり、指導の態度は厳格な中にも、学生の気づきを待つ根気強い態度で接せられ、必ず前向きに研究を進展させるような建設的なコメントを適切に与えられた。それは教室でも、学会の討論の場でも同様であった。

大学や学会というものが時代の潮流にもまれ、漂い出すかのごとき現状にあって、蜂矢先生に去られる私たちの不安は言葉には尽くせないものがある。しかし、今はただその広大な学恩に少しでも報いるべく、本輯の特集をもって感謝の気持ちに換えるのみである。本輯は、大阪大学において先生に連なる一一人の著者により、国語学の特集を組むものである。また本輯とは別に、国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究二十九』が、蜂矢真郷教授退職記念の集として刊行される予定であることを申し添えておく。合わせてご覧いただくならば幸いである。